



## LCアルモーニカ オペラ「ドン・カルロ」

ベルディのオペラ作品の中でも、規模や内容において重厚な趣を持つ「ドン・カルロ」が、在札オペラ団体「LCアルモーニカ」により原語で道内初演された。

この作品は、重苦しい人間葛藤が展開されるが、中でも岩見沢市出身の大塚博章（国王フィリップ二世）＝写真左端＝は、

第2幕で権力の頂点にいながら自分の心を誰も救済してくれぬ孤独を赤裸々に吐露する。その存在感のある低音の響きは、深層の苦悩を鮮明に掘り起こし、ワーグナーの「指輪」での神々の長ヴォータン同様、この物語の支柱を堂々と演じた。

国王と王子から求愛される南出薫（エリザベッタ）＝同右端

＝は、長大なアリア「世の虚しさを知る神よ」を毅然と歌いきり、斉藤みゆき（エポリ公女）が嫉妬から後悔への心の変化を妖艶な美声で歌い分けた。伸びやかなテノールを聞かせた所谷直生（ドン・カルロ）＝同手前中央＝と物語を推進させる重要な役回りを真摯に歌いきった今野博之（ロドリゴ）の熱演も

印象的。杉原直基の指揮は、特別に編成されたオーケストラと舞台袖の吹奏楽を的確な指示で劇的にまとめ上げ、エル・グレコの絵画を参考にしたという三浦安浩の演出は、人間の本性に迫る「対立・葛藤」をテーマに大道具のユニットを柔軟に組み合わせる効果的な舞台転換をしながら、

現実と幻想を同じステージ上で見事に調和させた。

一般公募も含め編成された合唱団は、バランスや音程で課題も見えたが、このオペラへの意気込みが十分に伝わり、まさに市民参加型の舞台ともなった。

同団は、これまで数々の本格的オペラを上演してきた。その成果の裏で経済的負担は、団員個

## 市民参加型舞台意気込み十分

印象的。

々のオペラへの熱い思いに支えられていく。今後、札幌では多

面舞台劇場の建設が予定されているが、中身を充実させるためにもこれら地元団体への行政的な支援は不可欠だろう。

立・葛藤」をテーマに大道具のユニットを柔軟に組み合わせる効果的な舞台転換をしながら、

大ホール

◇10日、札幌市教育文化会館